

※令和6年1月展示

短歌「花ぐもりいささか風のある日なりひる野火もゆる高遠の山 水穂」	太田水穂 大正8(1919)年作 歌集『雲鳥』収録
短歌「大河の闇をうちゆく艫の声のよ寒となりし水のともし火 水穂」	太田水穂 大正14(1925)年作 歌集『冬菜』収録
短歌「菜のはなのひとうね金をゆらめかす背戸のはたけもちるさくらなり 水穂」	太田水穂 昭和15(1940)年作 歌集『流鶯』収録
短歌「戸を明けて柳に風も無き日なりくつろぎたまへ雛のきみたち 水穂」	太田水穂 昭和13(1938)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「此のゆふべ外山をこゆる秋かぜに椎もくぬぎも音たてにけり 水穂」	太田水穂 大正7(1918)年作 歌集『雲鳥』収録
短歌「ふかき夜の家ぬちのやみにくだもののかもす匂ひのみちてあふるる 光子」	四賀光子 昭和8(1933)年作 歌集『朝月』収録
短歌「霜日和けふよくはれて縁におく千輪菊に蜂のより来る 喜志子」	若山喜志子 昭和23(1948)年作 歌集『芽ぶき柳』収録
短歌「いつしかに月の光のさしてをる端居さびしきわがすがたかな 牧水」／ 短歌「形にそふ影とし念じうつそ身をわれはや君にささげ来にしを 喜志子」	若山牧水 大正7(1918)年作 歌集『くろ土』収録／ 若山喜志子 昭和3(1928)年作 歌集『筑摩野』収録
短歌「うす紅に葉はいち早く萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花 牧水」	若山牧水 大正11(1922)年作 歌集『山桜の歌』収録
短歌「冬の日の暮るるに早し学校より一人一人に帰り来る子ども 赤彦」	島木赤彦 大正11(1922)年作 歌集『太虚集』収録
短歌「家うらの桑の畑によごれたる古雪たたき雨ふりしきる 赤彦」	島木赤彦 大正8(1919)年作 歌集『氷魚』収録
短歌「年並みに生れ来し友はたのしけれ一と日集ひてもものうち語る 赤彦」	島木赤彦 大正13(1924)年作 歌集『太虚集』収録
短歌「盆栽の五寸ばかりの冬楓こころ引くなりさみしき境に 空穂」	窪田空穂 昭和15(1940)年作 歌集『冬日ざし』収録
短歌「鉦ならし信濃の国をいきゆかば在りしなごらの母見るらむか 空穂」	窪田空穂 明治38(1905)年作 歌集『まひる野』収録
短歌「わらはべのひとり遊びや日のくるる澤のたぎちにうつつなくあり 迢空」	积迢空 大正12(1923)年作 歌集『海やまのあひだ』収録
新春歌 今井邦子 (1)暁の雲にひびきて高鳴くや神代ながらの鶏の声／(2)天の戸の光ゆららに鶏は命ゆらぎて鳴きうたふらし(暁鶏声二首)／(3)蒼雲を麓となして新年(にひとし)の雪を高敷(し)き不二はよそへり／(4)新年の銀座十字街(つむ	今井邦子 (1)全歌集になし／(2)昭和7(1932)年作 歌集『明日香路』収録／(3)昭和6(1931)年作 歌集『明日香路』収録／(4)昭和16(1941)年作 歌集『こぼれ梅』

じ) に止められし人の群がりに春たつらしき／(5)夜(よる) ふかし大晦(おほつごもり) のしまひ湯を落すひびきはやはらぎ聞こゆ／(6)一とせに一度のたよりとりかはす人々の上をしまし思ふも／(7)このあした吾子ののべたる祝ひ言吾をおどろかし心笑ましき／(8)うごきうごく時の流れにまかせねど吾をゆすりて来るおもひあり／(9)沫雪(あはゆき) のながらふ夜らも松の内や着飾りてゆくをみな子にあへり／(10)鉢植のただ一輪の白梅もしみじみとして身にあまるかな	収録／(5)昭和3(1928)年作 全歌集内『拾遺集』収録／(6)昭和3(1928)年作 全歌集内『拾遺集』収録／(7)全歌集になし／(8)昭和7(1932)年作 歌集『明日香路』収録／(9)昭和5(1930)年作 全歌集内『拾遺集』収録／(10)全歌集になし
短歌「たたかひは人間のことか大明湖のあをあしむらになけるよしきり 瀏」	斎藤瀏 昭和3(1928)年作 掲載不明
短歌「はしならし花喰鳥のくるといふはな喰鬼とわれはならむか 史」	齊藤史 昭和51(1976)年作 全歌集内『昭和五十一年作品』収録
短歌「濁流に杭一本が晩秋のあらき光をうけとめている 克巳」	加藤克巳 昭和28(1953)年作 歌集『宇宙塵』収録

※令和5年8月展示

短歌「わが山や椎くれてゆくたそがれのしめりのなかのしら梅のはな 水穂」	太田水穂 昭和13(1938)年作 歌集『螺鈿』収録
「祝言興行 水穂作／雲を出て一入月のひかり哉／餅搗きをへて杵洗ふ臼／とりあげてみれば誠に男なり／囲炉裏に薪のはぜる元日／日のあたる藪の中よりささ啼きて／手水の桶の氷ゆるまる／表六句を書して送る 水穂自句」	太田水穂 掲載不明
短歌「さき足りておのれしづる藤浪のながきひさしき心わするな 水穂」	太田水穂 昭和08(1933)年作 歌集『鶉』収録
短歌「このやどの梅に来て啼くうぐひすのはつはつしかるけさの一声 水穂」	太田水穂 全歌集になし
短歌「高島のうらの朝風にときはなつ百八十ふねの光りながれたり 水穂」	太田水穂 昭和15(1940)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「鉢伏の山を大きく野にすゑて秋年々のつゆくさの花 光子 九十歳」	四賀光子 昭和23(1948)年作 歌集『双飛燕』収録
短歌「常念の峯にゐる雲しばしだに晴れよとまちて時たちにけり 喜志子」	若山喜志子 昭和28(1953)年作 歌集『眺望』収録
短歌「園の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの日の静けかりけり 牧水」	若山牧水 大正10(1921)年作 歌集『山桜の歌』収録
短歌「秋風のそら晴れぬれば千曲川しろき河原に出てあそぶかな 牧水」	若山牧水 明治43(1910)年作 歌集『路上』収録
短歌「光さへ身にしむ頃となりけり時雨にぬれしわが庭の土 赤彦」	島木赤彦 大正10(1921)年作 歌集『太?集』収録

短歌「山道にゆうべの雨の流したる松の落葉はかたよりにけり 赤彦」	島木赤彦 大正 11(1922)年作 歌集『太?集』収録
短歌「親すずめしきりになきて自が子ろをはぐくむ聞けばなげくに似たり 赤彦」	島木赤彦 大正 11(1922)年作 歌集『太?集』収録
短歌「どうだんの枝移りして飛ぶ雀枯葉音を立つうつるがままに 初冬 家居空穂」	窪田空穂 昭和 04(1929)年作 歌集『さざれ水』収録
短歌「わが立てる大竹ばやし葉ごもりに鳴るは空よりふり来る雨か 嵯峨野にて 空穂」	窪田空穂 大正 10(1921)年作 歌集『青水沫』収録
短歌「みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそおもへ 佐久間象山 空穂書」	佐久間象山 『愛国百人一首』収録
自筆書簡「光男君病漸くあつく自ら終焉の近きを知るや・・・ 伊藤左千夫撰?書」	伊藤左千夫 大正 02(1913)年書
短歌「上代よりいへる荒魂和魂のふたつ合し居ば事なるべしや 麓」	岡麓 掲載不明
短歌「庭にいでもぐらの穴に水をつぐこの気散じのわれを笑はす 瀏」	斎藤瀏 昭和 14(1939)年作 歌集『四天雲晴』収録
短歌「ふたたび来てやまのみどりにむかひ居りこの木かのきにみおぼえのある 迢空」	积迢空 掲載不明

※令和 5 年 6 月展示

短歌「晴天にひと花ひらく白牡丹海とほくみゆる青芝の庭に 水穂」	太田水穂 昭和 12(1937)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「菊の露しづれしづれて真玉ともおもふ夕べのこほろぎの声 水穂」	太田水穂 昭和 17(1942)年作 歌集『流鶯』収録
短歌「屋廂に音たててふる榎の落葉ころけふよりしぐれを恋ふる 水穂」	太田水穂 昭和 13(1938)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「人ごころあやふきに花鳥の天のひろ道いや盛んなれ 水穂」	太田水穂 昭和 21(1946)年作 歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらのゆくかたもみむ 水穂」	太田水穂 昭和 09(1934)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「一夜ねて雲とぶそらに今朝きくや即非の松の秋かぜのこゑ 光子」	四賀光子 昭和 07(1932)年作 歌集『朝月』収録
短歌「うす墨にあるのふじみてすそのなす野なかのふじによる雲もなし 喜志子」	若山喜志子 全歌集になし
短歌「わが庭の竹の林の浅けれどふる雨みれば春は来にけり 牧水」	若山牧水 大正 05(1916)年作 歌集『朝の歌』収録
短歌「かたはらに秋くさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな 牧水」	若山牧水 明治 43(1910)年作 歌集『路上』収録
短歌「風にむかふわが耳鳴りのたえまなし心けどほくただ歩みをり 赤彦」	島木赤彦 大正 09(1920)年作 歌集『太虚集』収録

短歌「わが庭の池の底ひに冬久し沈める魚の動くことなし 赤彦」	島木赤彦 大正 09(1920)年作 歌集『氷魚』収録
短歌「福寿草の蒼いとほしむ幼子や夜はみろりの火にあてて居り 赤彦」	島木赤彦 大正 10(1921)年作 歌集『太虚集』収録
短歌「電燈の遠き灯のさす草の葉の土にはへるが皆ゆ(らぎ出づ) 空穂」	窪田空穂 昭和 10(1935)年作 歌集『郷愁』収録
短歌「ふる里にありやとまどふ夕ぐれを蕎麦うつ音のもりて来る家 空穂」	窪田空穂 昭和 24(1949)年作 全歌集になし
短歌「ふれがたき枝と見ゆれどぼけの花こぼるるばかり赤き花さく 寛」	与謝野鉄幹 歌集『相聞』収録
短歌「山めぐりさとめぐりしてむらしぐれ木々の紅葉を千々に染らむ 八十六叟 浅井冽」	浅井冽 昭和 09(1934)年作 掲載不明
俳句「大空に又わき出でし小鳥かな 虚子」	高浜虚子 大正 05(1916)年作 句集『五百句』収録
俳句「新茶煮て此緑陰の石を掃ふ 七十九 鳴雪」	内藤鳴雪 明治 42(1909)年作 句集『鳴雪句集』収録
俳句「鳥一聯浅間かすかに噴きぬけり 美穂」	田中美穂 掲載不明

※令和 5 年 4 月展示

短歌「高はらの古りにし駅に霽るる日の明るさ入れて郭公の啼く 水穂」	太田水穂 昭和 21(1946)年作 歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらの行方もみむ 水穂」	太田水穂 昭和 9(1934)年作 歌集『螺鈿』収録
短歌「なにごとかありけるごとく芥子畠の芥子ひとところ風にさゆらぐ 水穂」	太田水穂 昭和 15(1940)年作 歌集『流鶯』収録
短歌「明日はこむ霜のけはひを大空のまたたきにみせてさゆる月かも 水穂」	太田水穂 全歌集になし
短歌「まかがよふ光のなかにあぢさゐの玉のむらさき冷やかに澄む 水穂」	太田水穂 昭和 5(1930)年作 歌集『鷺』収録
短歌「たらちねのははをこふればいはけなく心は泣かゆ老いつく今も 光子」	四賀光子 昭和 17(1942)年作 歌集『麻ぎぬ』収録
短歌「春の野のしたもえ草のあさみどりあやふくぞおもふ生ひ立つ子等を 喜志子」	若山喜志子 昭和 5(1930)年作 歌集『現代短歌叢書 若山喜志子篇』収録
短歌「うす紅に葉はいち早く萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花 牧水」	若山牧水 大正 11(1922)年作 歌集『山桜の歌』収録
短歌「冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ澄めるむらさきにして 牧水」	若山牧水 大正 10(1921)年作 歌集『山桜の歌』収録

短歌「死火山の裾野の冬の猶長き日かず思ひつつ灯をともしかも／西窓のうすら明りに藁を打つとなりの音のはや聞え居り／明治四十五年夏七月 柿の村人」	島木赤彦 明治 45(1912)年作 歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「草枯の国のくぼみにかたまれる沼のいくつに日のあたりけり 柿の村人」	島木赤彦 明治 44(1911)年作 歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「八丈島 はるばるに波の遠音のひびきくる木のかげ深く月夜の踊り 赤彦」	島木赤彦 大正 3(1914)年作 歌集『切火』収録
短歌「海の風南よりふけば六甲のたか根の草はみな花となれり 六甲山上にて空穂」	窪田空穂 大正 10(1921)年作 歌集『青水沫』収録
短歌「道の辺のたかき黒松見あぐれば冬来し空の眼のうへに見ゆ 空穂」	窪田空穂 昭和 2(1927)年作 歌集『青朽葉』収録
詩「伝説の美女を背に戴せて先史時代の王者を征服する蝸牛 孤雁」	吉江孤雁 昭和 5(1930)年作 吉江喬松詩集『蝸牛の銀の涙』より
短歌「物思ふ葦にしあればゆく雲の高きに舞はむ心をわがもつ 青丘」	太田青丘 昭和 22(1947)年作 歌集『国歩のなかに』収録
短歌「ゆあみをへてさかづきとればはこねやまもみじもよへりみねのゆふひに羽衣」	武島羽衣 掲載不明
短歌「霜を含む小鳥の啼く音細ければ朝は身にしむ山の静けさ 柊花」	中村柊花 昭和 10(1935)年作 歌集『山彦』収録
短歌「天つ日の照れる寂かさや畳なはる山並のうねり四方につづける 古實」	藤澤古實 大正 10(1921)年作 歌集『国原』収録